

平成30年度 上伊那圏域地域自立支援協議会議事録

会議	部会名	第4回 療育部会	参加者数	68人	会場	伊那市 防災コミュニティセンター 多目的ホール
	日時	平成31年2月14日(木) 14:00～16:00				
主テーマ	1 講演:「発達障害の地域支援システムづくり」 2 伊那市と飯島町の支援体制についての発表 3 本田先生によるスーパーバイズ 4 質疑応答					
主な意見など	※今回の部会は「発達障がいサポートマネージャーとの合同研修会」として、企画・開催された。 1 について ○講師:本田 秀夫先生 信州大学医学部子どものこころ発達医学教室教授 信州大学附属病院子どものこころ診療部部長 ○標記テーマによる講演が行われた。概要は、次のとおり。 (1) 発達障がいについて ・DSM-5では、現在、「神経発達症/神経発達障害群」に分類され、知的障がいと同じカテゴリーとなる。 ・成人期に精神科を初診する発達障がいの人たちの診断は、しばしば複数にまたがることが多い。 ・自閉症の特性の一部は、他の発達障がいの併存で目立ちにくくなる傾向がある。 ・克服のための訓練型アプローチと療養型アプローチのバランスが重要→チームアプローチの必要性。 (2) 発達障がいの支援ニーズ ・多くの地域で、少なくとも学齢児の10%程度(潜在的ニーズ)と推定され、顕在ニーズは、6%程度である。 ・自治体規模に応じて、支援ニーズの数は変動する→自治体規模に応じた支援システムの構築が必要。 ・チームアプローチには、多職種参加型、多職種協業型、超職種型があり、超職種型が現代的かつ理想的。 (3) インターフェイス(つなぎ)のある支援システム ・支援システムの構築を考える際、つなぎの役割をどの機関、誰が担うのかを明確化する必要がある。 ・発達段階に応じたつなぎのシステムとして、「継時的インターフェイス」(例:小学校→中学校間の引継ぎ)と支援の専門性に応じたつなぎのシステムとして、「共時的インターフェイス」(例:日常的支援→専門職療育的支援へのつなぎ・情報共有・紹介等)の両方を地域支援システムに組み込んでいくことが大切である。 ・地域支援システムは、自治体規模に応じて、ハードウェア、ソフトウェア、ヒューマンウェアをそれぞれ整備していく必要があり、より高度で専門的な支援は、小規模市町村の場合、圏域や県のバックアップも必要となる。					
	2 について ○講演を受け、インターフェイスを含めた発達支援体制モデルを伊那市と飯島町の担当者が発表した。 (1) 伊那市における発達支援体制について(伊那市子ども相談室 相談支援専門員 町田 恵子 氏より) (2) 飯島町における発達支援体制について(飯島町健康福祉課 主任保健師 岡野 裕子 氏より) ・伊那市では、0～3歳児の日常的支援から専門職療育的支援へのつなぎとして、遊びの教室が年齢ごとに「じゃんぷ・すてっぷ・どんぐり」と用意されているなどの特徴がみられ、つなぎの支援体制も充実していた。 ・飯島町では、OT・ST・心理士相談を組み込み、ひきこもり支援員を導入するなどの工夫がみられた。 ・いずれの市町とも、年齢が上がるにつれ、特に高校以降のインターフェイス資源が不足する傾向にある。 3 について(講師の本田先生より) ・伊那市は、小規模市として、インターフェイスの仕組みづくりが進み、実践している印象を受けた。幅広い年齢層に対応した支援が展開されている。グレーゾーンの子どもの対応機能も入っており、評価できる。成長ダイアリーについては使用率を調べてみてほしい。保健師と子ども相談室が連携できており、素晴らしい。学校間のつなぎは、法的なものが主に書かれているが、学校は支援が自己完結することもあるので、外部連携が重要となる。医療は、多くの医療機関を示してある。1か所に紹介が集中しすぎないように、適切な情報提供により、保護者(本人)が受診を希望する医療機関を自ら選択できる提示方法も大切になる。 ・飯島町は、小規模町村として、きちんと取り組んでいる印象。小さい町村できちんとできている所が、一番支援が手厚い傾向がある。保健師がキーパーソンになっている。合わせて、他のしくみも作っていいとよい。巡回相談のOT・ST等を圏域の他市町村の資源で補っている部分も素晴らしい。高校卒業後、福祉現場へ支援が戻ってくるつなぎがどこの市町村でも課題となる。ここはきりあや圏域で考える課題となる。ひきこもり支援に町として力を入れているのも興味深い。医療連携は、待つでも地元の医療機関へつなぐのが正解。待つ間の支援の充実やうまく医療につなげる地域のしくみ、体制づくりも今後考えていけるとよい。 4 について(紙面の都合上、質問事項のみ記載) ・医療機関の紹介のしかた(医療機関によりデータ提供の有無等、対応に違いが見られ、紹介先を悩む) ・成長ダイアリーの見直し(保護者負担軽減につながっているか、活用実態や記載事項の見直しが必要) ・飯島町のひきこもり支援員の活動実態について ・18歳以降の成人期の支援体制の構築について					
まとめ	・地域支援システムの構築の際は、つなぎ部分を明示する手法で地域分析を行う大切さを学ぶことができた。 ・実際の地域分析例をもとに、つなぎの支援の充足状況や今後必要な社会資源等を皆で考えることができた。					
次回	・今回が今年度の最終部会となります。1年間、ありがとうございました。 来年度も大勢の皆様のご参加、よろしくお願ひします。					